

下原八幡神社屋台調査報告

令和2年3月

高山市教育委員会文化財課

牛丸 岳彦

下原八幡神社屋台調査報告

令和 2 年 3 月
高山市教育委員会文化財課
牛丸 岳彦

■調査にいたる経緯

平成 28 年 12 月 1 日、高山祭の屋台行事が「山・鉾・屋台行事」の一つとしてユネスコの世界無形文化遺産に登録された。現在、国指定の重要有形民俗文化財の「高山祭屋台」は山王祭の 12 台、八幡祭の 11 台が、また県指定の有形民俗文化財として総社、東山白山神社の 2 台が指定されている。しかし、指定されているものの他にも、山王祭や八幡祭では、現在は失われている屋台があり、朝日地域や荘川地域でも屋台が存在していることが一部では知られていた。平成 30 年度に祭屋台や各地域の伝統文化の保存・復刻に向けた調査が予算化され、平成 31 年度までの 2 か年でこれらの屋台について調査が行われることになった。

下原八幡神社の屋台は現在、下呂市金山町中津原に所在する下原八幡神社境内の一画の屋台蔵に保管されているが、かつては八幡祭の屋台の一つ、大津絵と呼ばれていた屋台である。一部改修が行われてはいるものの、古い形態の屋台の形式をよく残しており、高山祭屋台の発達史上貴重なものである¹。これまで調査はほとんど行われたことがなかったが、下呂市役所や下原地域住民の間でも保存の機運が高まっていることもあり、下呂市教育委員会とも協力し、調査が行われることになった。調査参加者は下記のとおりである。

下呂市教育委員会 文化財担当 馬場伸一郎 田中恵梨
高山市教育委員会 文化財課 牛丸岳彦 田尻勝則

■屋台の経歴

この屋台は元々高山の八幡祭の祭礼で用いられていた。八幡祭の享保 3 年（1718）のものとする記録²では判然としないが、組に残る箱書に延享 4 年（1747）の年号が残されており、このころには曳行されていた。屋台組は現在の高山市下二之町の南側、鳩峯車組と呼ばれている地域だが、創建からしばらくは「大津絵」と呼ばれていた。文政 9 年（1826）には傷みがひどくなり、曳行に支障をきたすまでになり、天保 6 年（1835）新たな屋台を作ることとなった。翌天保 7 年（1836）、下原村の八幡神社から屋台を譲り受けたいという

¹ 長倉三朗 1981 『高山祭屋台雑考』慶友社

² 柚原三省の日記による。享保 3 年（1718）の上村木曾右衛門の記録を天明 6 年（1786）に柚原三省が書き写したものである。

申し入れがあり、売り渡すこととなった。

車輪については別の屋台組に売り渡すという記録があり、下原八幡神社では自前で車輪を取り付けたと考えられる。昭和 29 年には屋根をトタンに改装、平成 6 年に下呂町乗政（当時）の大工片岡善次により修理が行われている。

■屋台の特徴

現在の屋台の特徴を以下に述べる。

次項で述べる『祭礼諸事留』によれば、斗組の上、虹梁と桁から上を屋根と認識していたようである。屋根は唐破風で六分割できるようになっており、垂木も屋根と一体化しており、ともに分割できる。斗組の上に絵様を施した虹梁と桁を置く。現状で天井はない。見え掛り部分には漆塗りを施し、懸魚、蟄股、鬼板、太平束、破風、虹梁、斗組などには金箔が施されている。平成 6 年の修理前のものと考えられる写真³でも漆塗りや金箔は確認できる。

屋根直下の台輪から下、高欄までが上段とされている。柱は角で古い特徴を持ち、頭貫を入れ長押を打ち、柱上には平台輪を置く。高欄は朱塗りの刎高欄で前面中央のみ蕨手とする。高欄台輪は漆塗りで銕金具が施される。斗と斗の間には鏡板がはめられ、正面のみに雨龍が描かれる。

斗組の下、頭貫から下の高欄までが中段である。柱は「通り柱」と呼ばれ大台輪の上に直接乗り、下段と中段を貫く角柱 6 本である。前後方向の柱間が一間、左右がほぼ 7 尺としている。柱の中段部分は漆塗りを施さず、当時は幕で覆われていたことが分かる。伊達柱はない。中段の高欄には擬宝珠をつける。

高欄より下、大台輪の上が下段とされる。柱間には格子を入れ、簾を張る。先の通り柱に縦の溝が残っており、かつては摺り上げて使用していたことが分かる。柱には朱漆が塗られる。

最下部は縦方向に大台輪を入れ、内台輪を挟み込む。ほぞ穴の痕跡などから、かつては内側に車輪を設けていたと考えられ、現在の車輪は候補のものである。大台輪の端部には絵様を施すが、浅い唐草としており、17 世紀代の社寺建築との共通性が見られる。引綱を通すための鉄カンが前後につけられており、綱で曳いていたことが判明する。

■鳩峯車台組『祭礼諸事留』に見る部材名称

鳩峯車台組には祭礼に関する文書も多く残されており、その中の一つに、祭礼に関する項目や費用などを記した『祭礼諸事留』がある。この中に寛政 11 年（1799）の屋台道具預けに関する記述があり、現在下原八幡神社が所有する屋台を解体し、鳩峯車台組の各家で保管していたことが判明する。

文書では家ごとに各部材の名称が順に記載されるが、屋台との整合性を検討するため、屋

³ 川上富子氏のご教示による。

根や上段、中段などの部位ごとに分け、上部から順に並ぶようにした。名前については便宜上登場順に A、B、C・・・とした。

一部特定できない部材があるものの、ほとんどの部材の位置を特定することができる。また、現在残る屋台の部材の中に「前之方 中たん頭ぬき」の墨書が見られるものがあり、一覧表の 32 に該当する。屋台道具預けの信ぴょう性を裏付ける一つの証左となろう。

ここで、屋台の部材ごとに預けられる家に一定の傾向が見られるかどうか検討してみる。屋根について見ると C 家が 5 点、L 家が 3 点、G 家が 2 点、F 家と N 家が 1 点ずつとなり、かなり分散している。C 家は鬼板、臺股など比較的立体的な部材を担当していたようである。また、B 家は幕類のほとんどを預かっており、G 家は長押、貫などの細く長い部材を比較的多く預かっている。家ごとにある程度の特性を持ちながらも、比較的分散して保管していたことがうかがわれる。

■まとめにかえて

下原八幡神社の屋台の屋根は唐破風で古い形態を残していると考えられる。現在の高山祭屋台の中で唐破風を持つものは八幡祭の仙人台のみであるが、文化年間の山王祭の様子を描いたと考えられる『高山山王祭礼行列絵巻』では、ほとんどが唐破風である。なお、仙人台については、別項で年輪年代の調査報告を掲載しているが、床板から 1792 年の年輪年代⁴を得ている。下原八幡神社屋台の年代は、仙人台の 18 世紀末と同程度、もしくは先述の文政 9 年 (1826) 時点で傷みがひどくなっていることを鑑みればさらに遡ると考えられる。

また鳩峯車台組の『祭礼諸事留』に見られる屋台道具預けに関する資料は、分解せずに屋台蔵に収納するようになる以前の姿を示す資料として貴重である。また、部材に墨書が見られるのは、分解して各家に預けるために、その名称を明らかにしておく必要があるからである。墨書の有無がある程度の年代判定に利用できる可能性を示唆している。もちろん、各部材の名称や、上段、中段など当時の部位の呼称についても知ることができる。今後のさらなる分析が求められるものである。

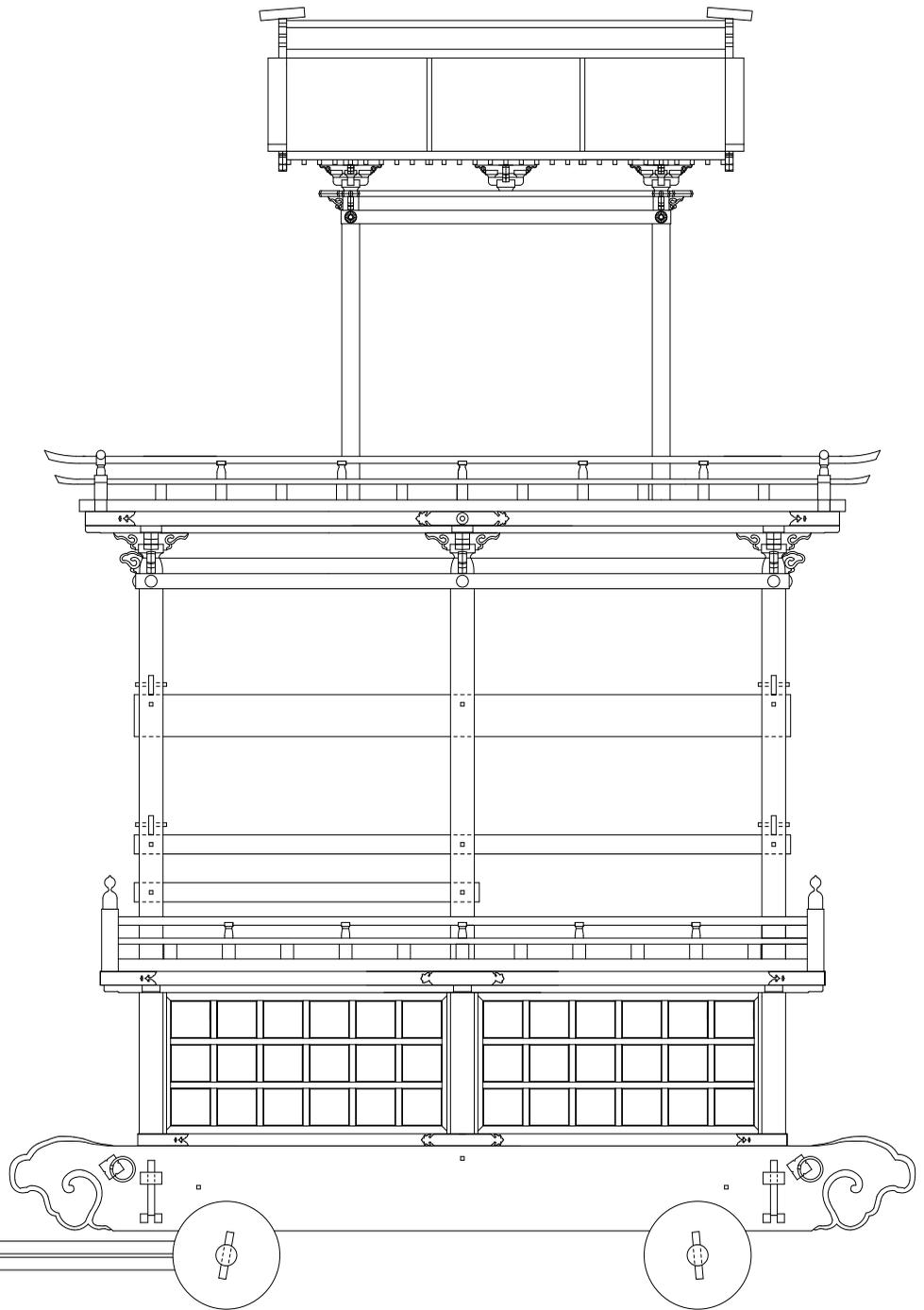
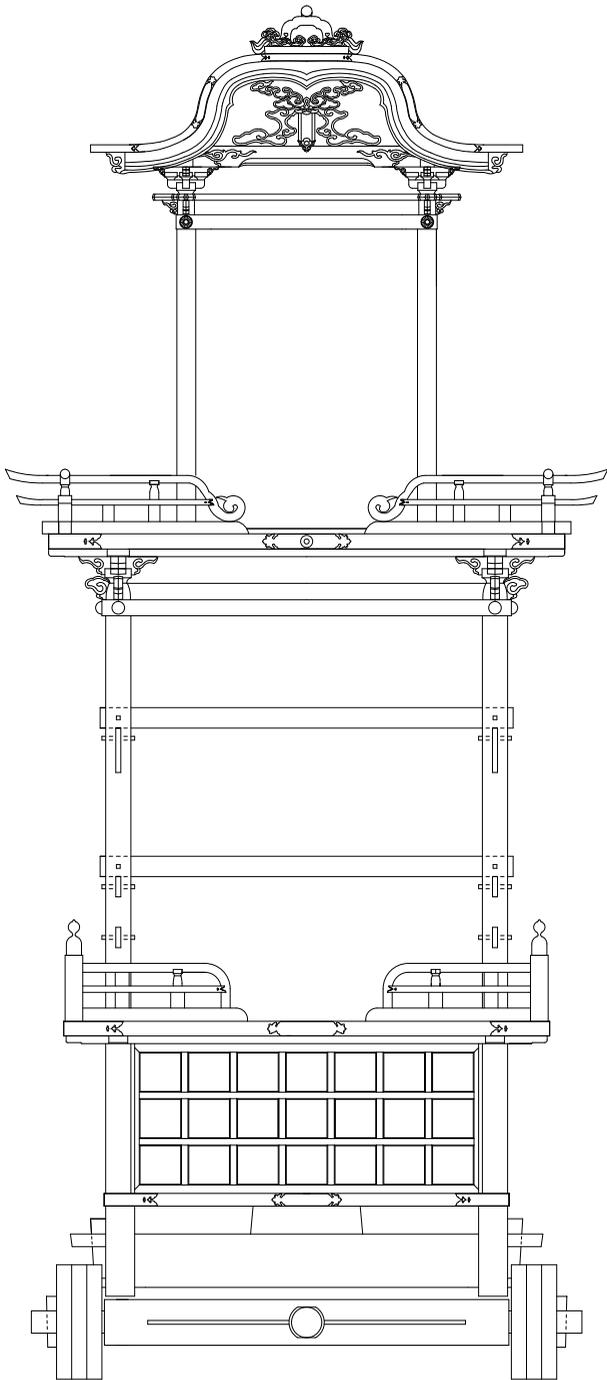
⁴ 年輪の幅から実年代を割り出す手法。この分析に用いた資料は、最も外側の部分まで残存しており、ほぼ伐採の年代を示していると報告されている。

寛政11年末8月 祭礼禮諸事留より屋台道具預け

No.	名前	部位	道具名	数	
1	C	屋根	鬼板	貳枚	
2	F	屋根	箱棟	壹ツ	
3	C	屋根	破風前後 (松印 壹箱内)	貳ツ	
4	L	屋根	萱押	貳本	
5	L	屋根	屋根	壹箱	
6	N	屋根	屋根	壹箱	
7	G	屋根	棟木	壹本	
8	C	屋根	かへるまた前後	貳ツ	
9	L	屋根	けた	貳本	
10	G	屋根	虹樑前後	貳ツ	
11	C	屋根	天井	貳枚	
12	C	屋根力	金鎌張	三枚	
15	F	上段	上段平臺輪 (柳印 壹箱内)	四本	
16	G	上段	上段頭檣 (梅印 壹箱内)	四本	
17	G	上段	上段長押	四本	
18	H	上段	上段組出し	四ツ	
19	A	上段	上段柱 (桜印 壹箱内)	四本	
20	J	上段	上段柱口 同柱かため口	貳本	
21	E	上段	上段 柱足かため	貳本	
22	L	上段	上段朱口高欄 (巴鶴印 壹箱内)	壹組	
23	L	上段	上段朱高欄左右 (亀印 壹箱内)	貳組	
24	G	上段	上段朱高欄前	貳ツ	
25	L	上段	上段高欄臺輪前後	貳本	
26	E	上段	上段臺輪 (橙印 壹箱内)	四本	
27	C	上段	上段幕竿	四本入	
28	H	上段	上段簾障子	六枚	
29	E	上段	上段 鏡板	四枚	
30	G	上段	雨龍板	六枚	
31	A	上中段	上段中段左右高欄臺輪 (桂印 壹箱内)	四本	
32	G	中段	中段頭檣前後	貳本	
33	L	中段	中段頭檣左右	貳本	
34	F	中段	中段長押左右		
35	G	中段	中段長押前後	貳ツ	
36	G	中段	きぼうし	四ツ	
37	L	中段	中段口高欄	壹組	
38	L	中段	中段高欄左右	貳組	
39	G	中段	中段高欄臺輪前後	貳本	
40	H	中段	中段前高欄	貳ツ	
41	I	中段	中段祢た	貳ツ	
42	J	中段	中段祢た掛け	五本	
43	J	中段	中段もたせ	貳枚	
44	F	中段	通り柱	六本	
45	K	下段	下段長押左右 (桐印 壹箱内)	四本	
46	G	下段	下段長押前後	貳本	
47	F	下段	下段地ふく左右		
48	G	下段	下段地ふく前後	貳本	
49	I	下段	下段祢た	七本	
50	I	下段	下段祢た懸	六枚	
51	D	台輪	大臺輪	五本	
52	D	台輪	内臺輪	貳本	
53	C	台輪	車	四ツ	
54	J	台輪	手艇	四本	
55	J	台輪	丸手艇	壹本	
56	C	台輪	引綱	壹筋	
57	H	部品	上中栓木 不残		
58	E	部品	大きくさび	四本	
59	J	部品	志やち	壹本	
60	H	部品	上中桝 不残 (竹印 壹箱内)		
61	E	部品	鉄真	四本	
62	I	部品	長檣経檣不残		
63	C	部品	補板不残		
64	C	部品	屋臺桐油	四枚	但例年虫干可至事

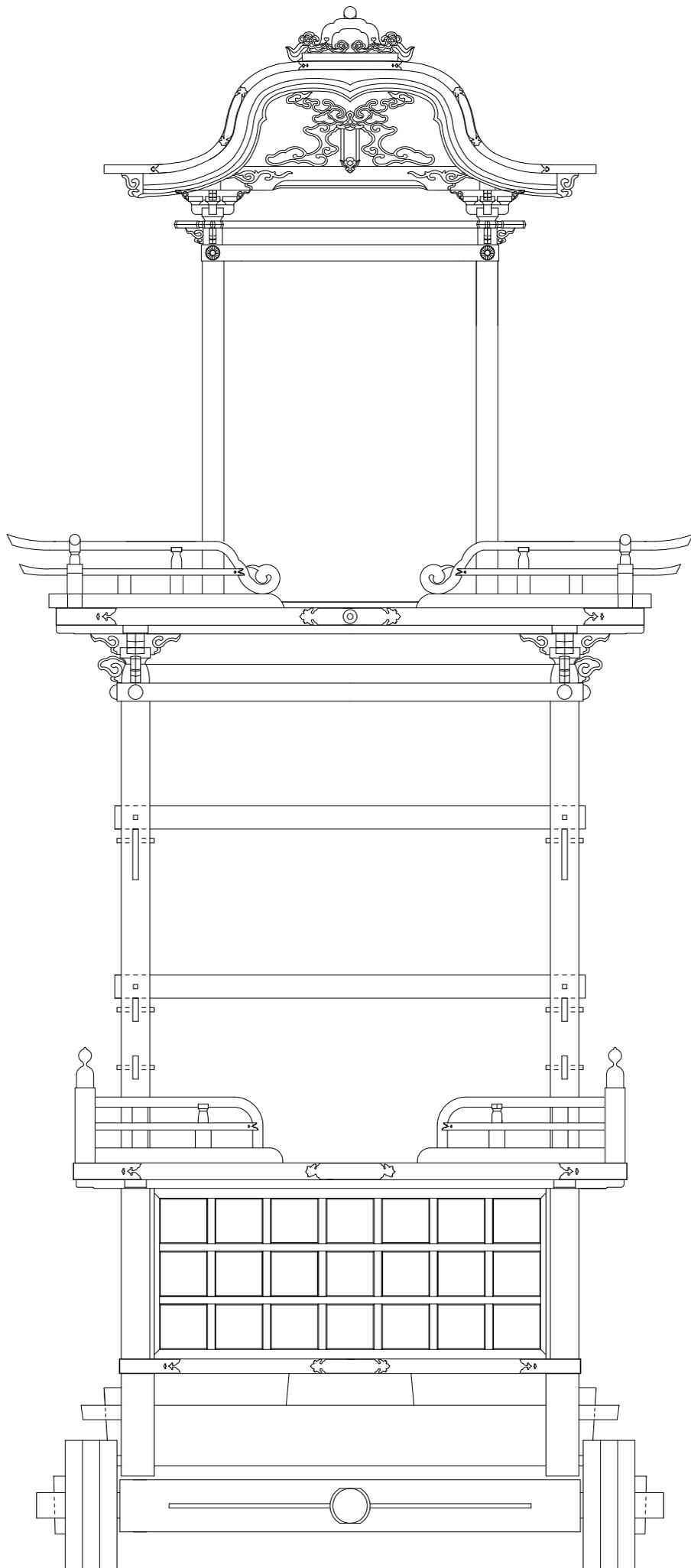
寛政11年末8月 祭礼禮諸事留より屋台道具預け

13	D	雨屋根	雨屋根	六枚	
14	D	雨屋根	雨屋根柱慣	三本	
65	F	人形	高砂松	壹本	
66	F	人形	高砂松板盤	壹台	
67	B	人形	人形壱箱 外に人形銚臺新添		
68	F	人形	人形樋	壹ツ	
69	J	人形	高砂人形頭壱箱		
70	B	人形	人形付踏吹	壹ワ但小屋口入	
71	N	人形	人形箱		
72	B	懸装品	浅黄幕		
73	B	懸装品	翠簾	壹連	
74	B	懸装品	本緋幕 (上段幕 壱箱内)		
75	B	懸装品	本緋幕乗りかね		
76	G	懸装品	幕竿	六本	
77	B	懸装品	龍の幕 (幕 壱箱内)		
78	B	懸装品	龍の幕たて紐	2筋	
79	B	楽器	鼓弓	壹挺	
80	C	楽器	小鼓	壹ツ	
81	L	楽器	小鼓	貳張	
82	B	楽器	三味線	壹箱	
83	C	楽器	摺鉦	壹釣	
84	C	楽器	太鼓	壹ツ	
85	B	楽器	能笛	壹本	
86	M	看板	看板□ 長押箱 〆		
87	K	看板	菊看板	十三	
88	K	看板	同三尺	十三	但看板例年虫干可至事
89	K	看板	同三尺	十四	
90	K	看板	矢之助看板	十四	
91	M	提灯	辻高張	貳張	
92	L	提灯	辻大てうちん	貳張	
93	O	提灯	辻長てうちん	九張	三箱之内御用棒通貳張入
94	N	提灯	辻桃灯道具不残		
95	L	提灯	てうちん棹	六本	
96	M	提灯	てうちん棹	六本	
97	L	提灯	八幡道桃灯	壹張	
98	J	提灯	桃提灯	五本	
99	C	提灯	桃提灯竿	六本	
100	I	提灯	桃提灯棹筒	参拾貳	
101	G	提灯	桃灯	八張	坂清より入ル
102	B	提灯	桃灯	八張入	張替に付御□□□□谷平分入候
103	L	提灯	桃灯	六張	
104	M	提灯	桃灯	壹張	
105	A	提灯	桃灯竿	貳本	
106	B	提灯	桃灯竿	五本	
107	D	提灯	桃灯竿	六本	
108	E	提灯	桃張	八張	
109	A	提灯	桃灯竿辻	貳本	
110	F		雨具経	壹釣 卯年より	
111	A		雨具経 卯年より	壹釣	
112	D		雨具長	壹釣 外入	
113	J		雨具長	壹釣	卯年より
114	K		笠	十四	
115	A		傘	参拾貳本 壹曲	
116	N		亀印	壹箱	
117	B		仮樋	壹ツ	
118	N		巴印箱	壹箱	
119	K		縁取	六枚	
120	N		縁取	六枚	



下原山車立面図 1/30

作図: 田尻 勝則



正面立面图 1 / 20

